筑 紫 野 市 阿志岐所在遺跡の調査

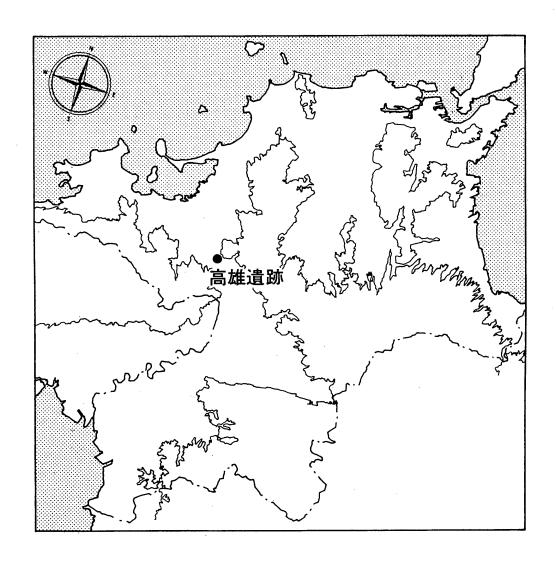
# 高雄遺跡 II

筑紫野市文化財調査報告書 第 4 8 集

1997

筑紫野市教育委員会

# 高雄遺跡 II



本書は、平成6年度に実施した高雄遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。

この高雄遺跡の所在しております区域は、太宰府市との市堺にあたり、近年都市部のベットタウンとして宅地開発も多く、これに伴う埋蔵文化財発掘調査も後を絶ちません。

この高雄遺跡もそのひとつで、弥生時代をはじめとして貴重な文化遺産を多く埋蔵する地域にあたり、西の都と呼ばれた「大宰府」を郭外から支えてきた地域でもあります。

今回は、やむなく記録保存し、調査終了後造成されてしまいましたが、古墳時代以降の先人達の 足跡を垣間見ることとなりました。

私どもの役割は先人達から受けついだ文化財を保護することで、今後もより一層の努力をいたしますとともに、これら発掘調査の成果につきましては、広く市民のみなさまの郷土の歴史を知る一助ともなればと考えております。

最後になりましたが、文化財に対して御理解いただきました(株)二日市興産をはじめとして、連日、 発掘調査に従事されました方々に心から御礼申しあげますとともに、本書が埋蔵文化財への理解と 認識を深める一助になれば幸いに存じます。

平成9年3月

筑紫野市教育委員会教育長 永渕 正敏

# 例 言

- 1. 本書は筑紫野市大字阿志岐1783-3番地に所在する高雄遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 調査は筑紫野市が二日市興産株式会社と埋蔵文化財調査委託契約を締結し実施した。
- 3. 高雄遺跡は、昭和43年団地造成の際に調査がなされているため今回の調査地点は高雄遺跡Ⅱとした。
- 4. 現地での実測・写真撮影は渡邊和子が行なった。
- 5. 遺物の復原作業ならびに本書作成にあたっての整理作業には、山内妙子・松尾敦子が従事した。
- 6. 出土遺物の実測ならびに製図は渡邊が行ない、遺物写真はフォトハウスおかに委託し撮影した。
- 7. 本書掲載の図の方位は、座標記載のものはG. N (座標北) で、座標記載の無いものはM. N (磁北) を使用した。
- 8. 本書では遺物実測図の番号と遺物写真の番号を統一した。
- 9. 題字は教育委員会、教務課主事平嶋陽子氏による。
- 10. 執筆・編集は渡邊が担当した。

### 本文目次 頁 I. 調査に至る経過 4 Ⅱ.位置と環境 4~5 Ⅲ.調査の概要 5 1. 土壙・出土遺物 5 · 7 2. 墳丘状遺構 7 • 9 3. 溝状遺構・出土遺物 10 4. その他の遺構・出土遺物 10~12 Ⅳ. まとめ 12~13

# 挿 図 目 次

Fig. 1 周辺遺跡分布図	(S 1/10,000)	1
Fig. 2 調査地点周辺地形図	(S 1/2,500)	2
Fig. 3 遺構配置図	(S 1/200)	3
Fig. 4 土壙実測図	(S 1/40)	6
Fig. 5 土壙出土遺物実測図	(S 1/3)	7
Fig. 6 墳丘状遺構実測図	(S 1/100)	8
Fig. 7 周溝土層実測図	(S 1/40)	9
Fig. 8 土壙墓実測図	(S 1/30)	9
Fig. 9 溝状遺構出土遺物	$(S 1/3 \cdot 1/2)$	10
Fig.10 窯状遺構土層図	(S 1/40)	11
Fig.11出土遺物実測図	(S 1/3)	11
Fig.12出土遺物実測図	(S 1/1)	12
Fig.13周辺中世以降墳墓分布図	(S 1/50,000)	13

# PL

PL. 1 全景(南側部分)・全景(北側部分)・土壙1・土壙2

PL. 2 1・2号墳丘状遺構・1号墳丘(北から)・2号墳丘(南から)・1号墳丘主体部

PL. 3 出土遺物

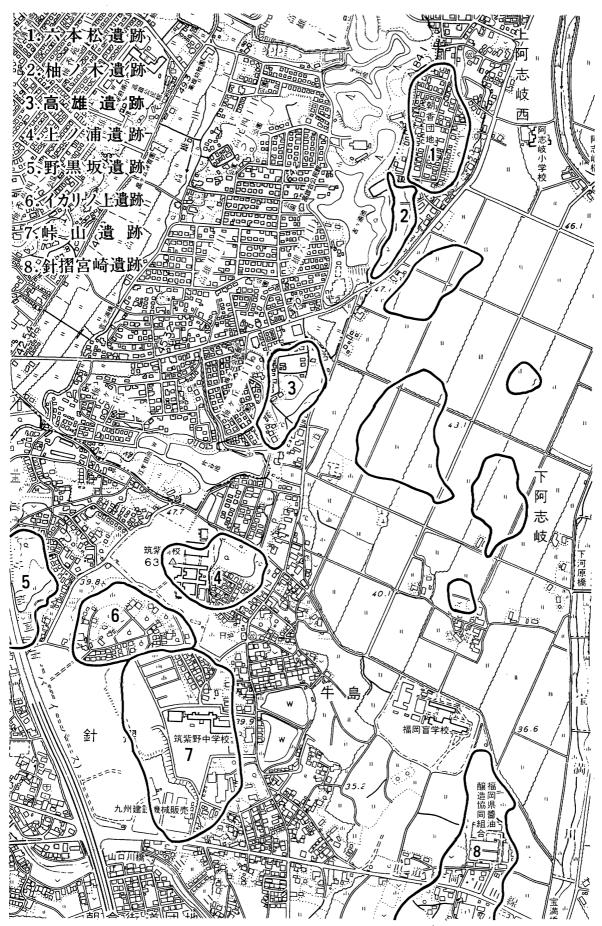


Fig. 1 周辺遺跡分布地図(S1/10,000)

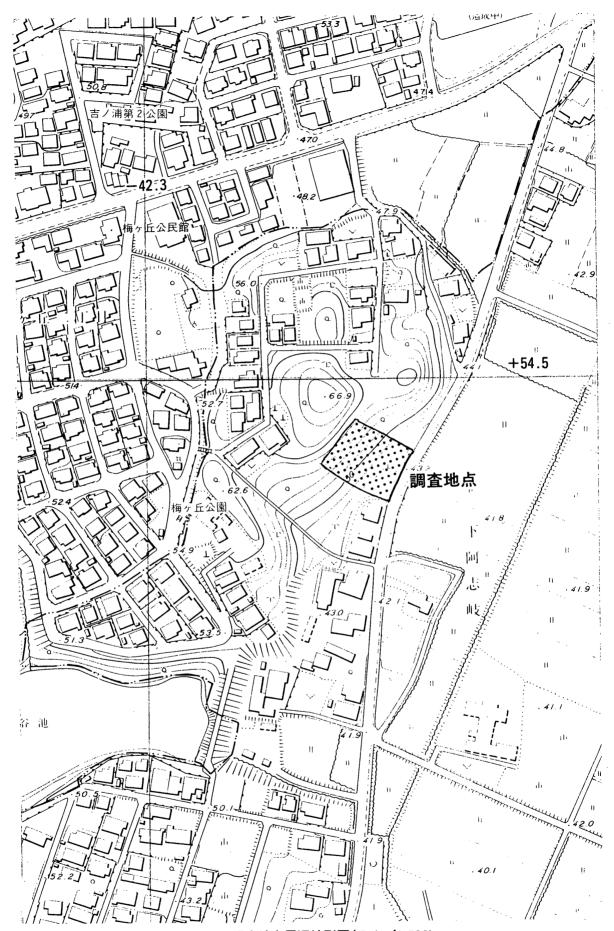


Fig. 2 調査地点周辺地形図(S 1/2,500)

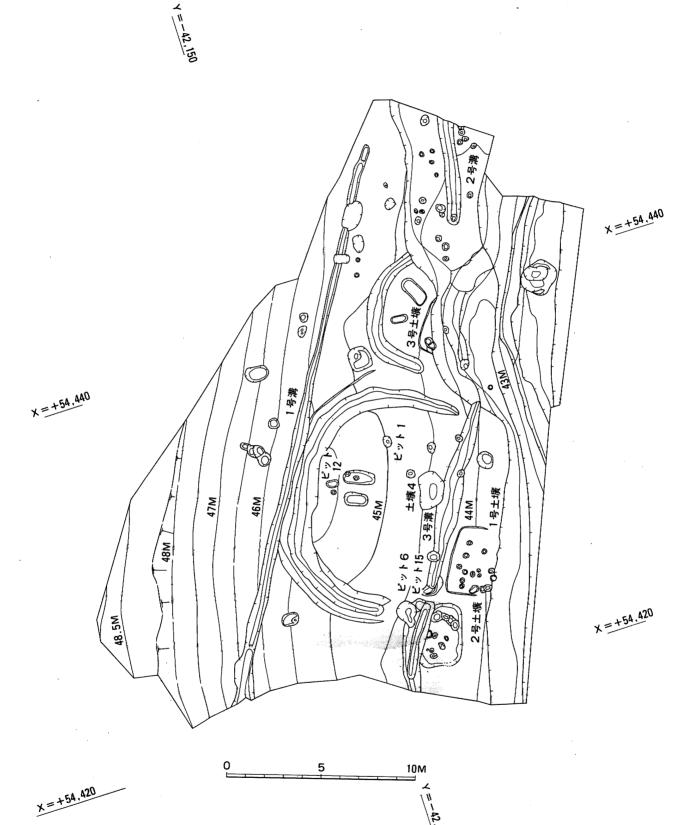


Fig. 3 遺構配置図(S1/200)

# I. 調査に至る経過

平成4年8月6日、建築業者より市内大字阿志岐1783-3番地に住宅建設を計画中である旨の届けがなされ、文化財の有無の照会がなされた。

当該地は周知の遺跡にあたることから、同年9月7日に試掘調査を実施した。丘陵部は、ほとんど荒造成がなされているが、試掘の結果、予定地内に遺跡の所在するのを確認した。

9月22日に文化財保護法第57条の6-1項の届出が提出され、県教育委員会より事前に発掘調査を実施する旨の通知があり、10月2日付で届出者に通達した。

その後、発掘調査等についての協議もなく経過し、平成6年4月6日に発掘調査委託申請書の提出があり、今年度中に調査を完了したいとの申請者の意向が強く、文化財担当内部で協議した結果今年度中に調査を実施することとなった。同年8月に再協議を行ない、9月16日付で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結。同9月29日、文化財保護法第98条の2項の通知を文化庁へ提出し同月20日より調査を開始した。

また整理および報告書作成の作業を平成6・8年度にわたって実施した。

#### 発掘調査の組織

平成6年度(発掘調査)

 調査主体
 総括
 教育長
 永渕正敏

 庶務
 教育部長
 永田晋一

社会教育課 課長 岡部隆充

文化財担当 係長 森実秀美(前任)

技師 渡邊和子

試掘調査 主事 奥村俊久

発掘調査 技師 渡邊和子

平成8年度(報告書作成)

総括 教育長 永渕正敏

庶務 教育部長 永田晋一

社会教育課 課長 岡部隆充

文化財担当 係長 古賀幸信

技師 渡邊和子

# Ⅱ.位置と環境

高雄遺跡は、福岡県筑紫野市大字阿志岐に所在する。

遺跡の所在する丘陵は、宝満山より派生した丘陵群のひとつ高雄丘陵の東南側に位置し、東側には、筑後川水系の支流宝満川が流れる。この宝満川の両岸は肥沃な沖積地を形成し、数多くの遺跡の存在が知られる。

調査地点は太宰府市との市堺で御笠地区阿志岐の水田地帯に面し、市道吉木一諸田線の吉木に通ずる道路の西側、標高43~47mを測る丘陵斜面部に位置する。

周辺の遺跡を概観すると小さな谷を隔てた北側には、弥生時代から古墳時代の複合遺跡で著名な

吉ヶ浦遺跡(註1)が存在する。吉ヶ浦遺跡は高雄丘陵の中央部にあり、この周辺部を高雄地区遺跡群(註2)として太宰府市教育委員会の発掘調査報告書などで述べられている。

この周辺域の低丘陵上には、弥生時代の遺跡が数多くあり、この周辺域の弥生時代の集落群の存在を示唆している。

また宝満川の西側の丘陵・丘陵縁辺には、塚口古墳群・六本松古墳群・吉ヶ浦古墳群・上の浦古墳群(註3)と多くの古墳群の存在が知られる。高雄遺跡に対峙して宮地岳(標高 339 m)があり、この西麓にも、杉谷古墳群・阿志岐古墳群(註4)・天山古墳群・老松神社古墳群などがあり、この時代も弥生時代に引き続き、この丘陵周辺域に集落群があったものと考えられる。

その後古代以降は、この周辺域は集落群としての利用のされ方よりも生産地や墓地としての役割 を担う様相をみせる。

- 註1. 福岡県教育委員会「5. 遺跡発掘現場紹介(4)、吉ヶ浦遺跡」(『教育福岡』昭和47年11号)
- 註2. 太宰府市教育委員会「高雄地区遺跡群」 太宰府市の文化財 第22集
- 註3. 筑紫野市教育委員会「上の浦遺跡」 筑紫野市文化財調査報告書 第14集
- 註 4. 筑紫野市教育委員会「阿志岐古墳群」、「阿志岐古墳群 Ⅱ」 筑紫野市文化財報告書第7·12集

# Ⅲ.調査の概要

調査区は、標高43~47mの丘陵斜面であるが、調査時は南端と中央部など荒造成がなされて平坦な所も認められた。試掘時の所見では表土下20~30cmの所に遺構が検出されていた。調査の都合上分割して調査を行ない、頂部に近い平坦面にTLを設定し確認したが、完全に削平されていて遺構は検出できなかった。その結果、中央付近に調査の重点をおいた。剥土途中でも弥生時代の遺物が多数見つかったことから、遺構の主体は弥生時代と考えられたと同時に馬蹄状の周溝および墳丘を確認し、この平坦面が積み土によるものと判断し、墳丘の調査に主眼を置いた。

検出した遺構は、墳丘状遺構2基、土壙4基、溝状遺構3条、灰原、Pit 50である。

# 1. 土壙(Fig. 4, PL. 1)

#### 1号土壙(Fig. 4、PL. 1)

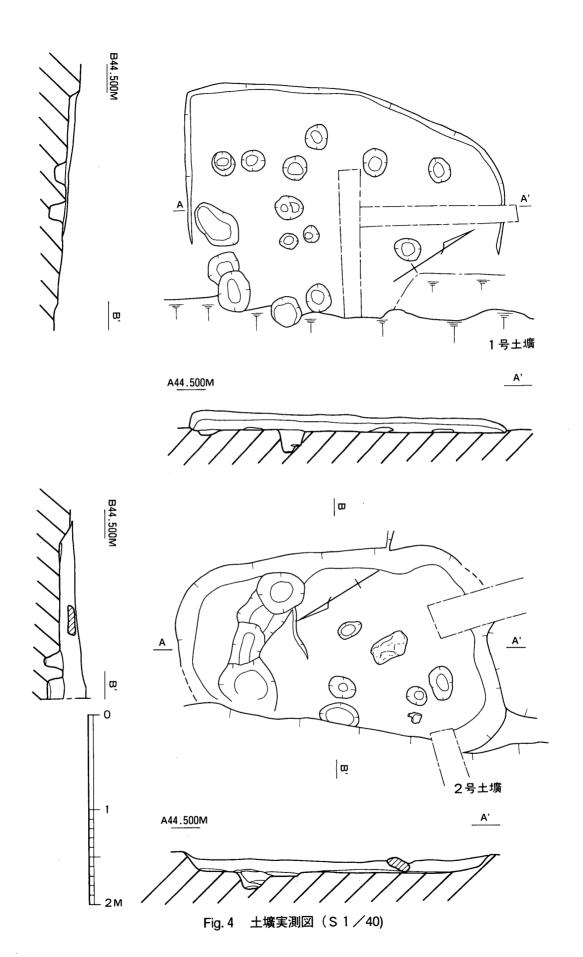
調査区の南西に位置する。長さ 3.3m、幅 2.2m以上、壁高最大 0.8mを測り、形状は不整長方形を 呈す。北東側は後世の攪乱のため失われているが、本来は竪穴状遺構の可能性もある。埋土には弥 生時代の土器片が若干含まれていた。

#### 2号土壙 (Fig. 4, PL. 1)

1号土壙の南西側で検出、3号溝に切られる。長さ3.2m、幅2m、高さ0.15mの不整楕円形を呈し、底面は平坦で、壁体は外傾する。底面に花崗岩製の石が検出されたが、使用された可能性はなかった。

### 3 号土壙 (Fig. 3)

2号墳丘状遺構の南側に位置する。遺構の大半は段落部分で大半が失なわれているが、長さ 2.3 m 以上、幅 0.6 m以上、高さ0.16 mを測る。壁体は垂直に立ちあがり、底面は平坦をなす。西側コーナー部の形状からして長方形もしくは正方形のプランを呈していたと考えられ、竪穴状遺構の可能性も含んでいる。このコーナー付近より蓋 (Fig. 5 – 5) が出土した。



# 4 号土壙 (Fig. 3)

3号土壙の直下で検出。長さ 0.7m、幅 0.4m、深さ 0.24mの不整楕円形を呈する。底面は二段の構造で、 壁体への立ちあがりは、やや外傾するものの垂直に近 い。出土遺物は、弥生時代の土器片のみであった。

3号土壙に伴うPit の可能性もあったが、埋土の状況 から判断して、別の土壙と考えた。

# 出土遺物 (Fig. 5, 1~5·PL. 3)

1は内外面ともに淡褐色を呈し、焼成良好な甕の口 縁部である。胎土には細砂粒が微量に含まれる。 2 は ローリングの著しい甕の口縁で、器表剥落のため調整 は不明。色調は内外面ともに白褐色を呈す。3は甕の 底部で焼成は普通、外面は淡褐色、内面は器表剥離の ため淡橙色をなし、調整は不明である。4は焼成不良 の台付甕の底部、内外ともに褐色、胎土には砂粒が多 い。5小型の蓋で外面は細い刷けで調整。内外面とも に淡橙色を呈す。1・3は土壙2、2は土壙1、4は 土壙4、5は土壙3から出土。

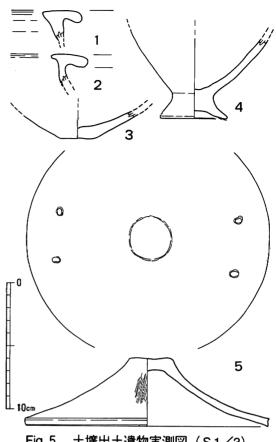


Fig. 5 土壙出土遺物実測図(S1/3)

# 2. 墳丘状遺構(Fig. 6·7·8, PL. 2)

調査区のほぼ中央部で2基検出。南側より1・2号とした。

# 1号墳丘

丘陵斜面部の標高45.5m~44.5m内外の所に位置する。墳丘の西側は後世の削平のため失われてい るが、径約25mを測る不整円形の形状を呈していたものと考えられる。墳丘は東側の遺存の良い所 で、高さ0.3 mしか残っていない。墳丘の構築は終末古墳の築造過程を彷彿とさせ、立地に関しては、 あたかも古墳時代からの流れを引き継いだように考えられる。旧地表面の上に粘質性の強い積み土 を初めに積み、さらにその上面に積み土を重ねて墳丘状のものを築造したと考えられる。

周溝は検出時には馬蹄状にしか残ってなく、陸橋部があったのか、周溝が完全に巡るのかは明確 でない。周溝の掘削もFig.7,1~3が示すように積み土によって形が整った後に旧地表面もしくは 地山面まで掘っている。溝の底面は緩やかに曲線を描く。周溝内からの出土遺物は、ほとんどなく、 積み土の中に多量の弥生土器片が含まれるが、この墳丘そのものの時期決定にはならない。

墳丘の中心より、やや東側に寄った所に並列して2基の土壙墓(Fig.8,5・6)が検出された。 1号は長さ 1.7m、幅0.75mを測り、2号は長さ 1.3m、幅0.75mを測る。1 ・2号いずれも高さは残 りの良い所で0.21mしかない。1・2号ともに形状は隅丸長方形を呈し、底面は概ね平坦をなす。

1・2号ともに木棺を埋置した痕跡や床面および壁面も熱を受けた痕跡は認められなかったが、 1号の埋土中には少量ではあるが炭が混っていた。他には出土遺物は含まれていなかった。

古代末から中世にかけて方形の低い墳丘をもち、一辺が10m前後を測る遺構で墳墓としたものに 近似しているが、規模が径約25m、形状が不整円形で、しかも立地が斜面にあるなど、同様のもの

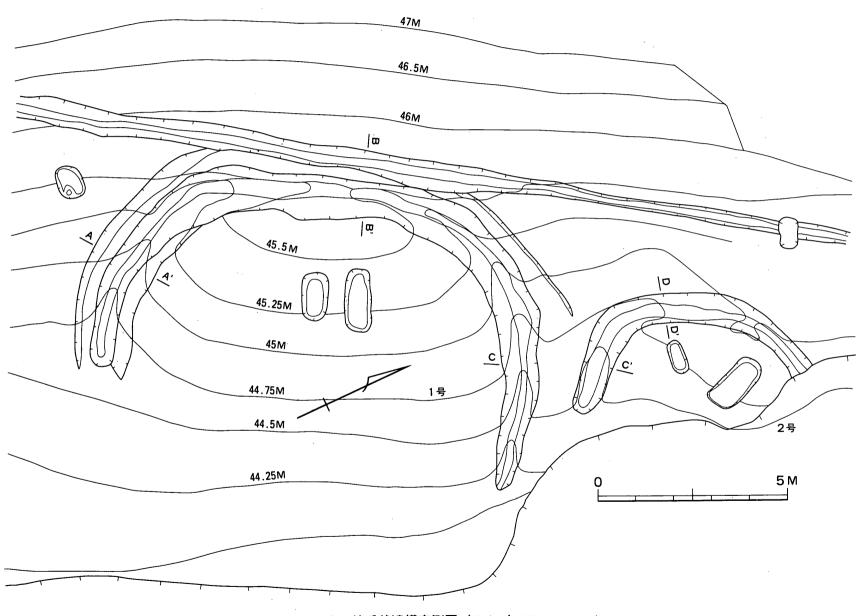


Fig. 6 墳丘状遺構実測図(S 1 / 100)

と考えるには躊躇する。しかしながら、尾根線上の占地と斜面の立地の違いはあるが、この $1\cdot 2$ 号墳丘の立地する斜面は、旧道が現道路面の約2m下であることを考えれば水田地帯に望んだ展望の良い場所であったことは疑いなく、占地のあり方も古墳と同様に時期差と捉えて、同種の遺構の可能性をもつものと理解しておきたい。

## 2号墳丘

1号墳丘の北側、標高 $45m\sim44.5m$ の所に位置。墳丘の北側および西側は後世の削平のため段落となって失われ、1/3強程度を残すだけである。1号墳丘よりさらに遺存状況は悪く、残りのよい所で0.1mの高さしかない。築造も1号と同様に旧地表面の上に積み土を重ねていった可能性をもつ。

周溝も形が整った後から掘削。溝の底面は平坦で逆台形の形状を呈し、残りの良い所で0.15mを測る。1号墳丘に近い南東部分は、やや角が丸くなった方形を呈す。しかし北側に延びるに僅かに曲線を描くため、現状では円形・方形いずれの形状を呈していたものか明確にしがたい。

墳丘の中心より、周溝に近い位置に 2 基の土壙墓 (Fig. 8 , 7 · 8) を検出。 1 号は長さ 1.5 m 、幅 0.7 m 、 2 号は長さ 0.9 m 、幅 0.4 m で、いずれも深さは残りの良い所で0.12 m 前後、底面は平坦である。内部は木棺埋置の痕跡や熱を受けた痕跡は認められないが、埋土中には若干量の炭が含まれていた。

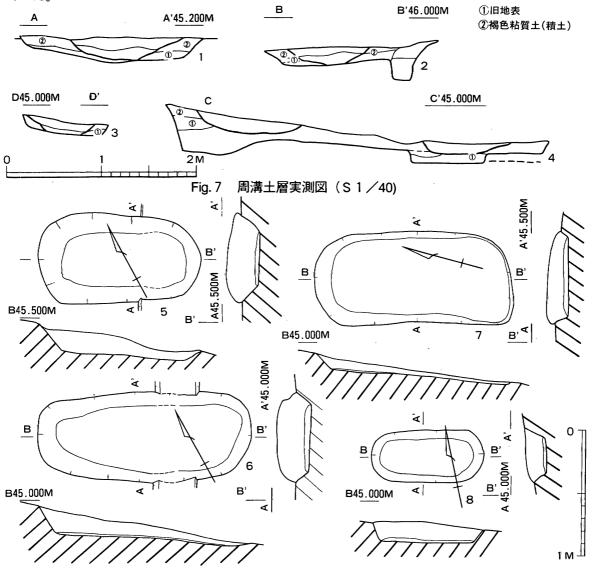


Fig. 8 土壙基実測図(S1/30)

# 3. 溝状遺構 (Fig. 3 PL. 1)

現道路にほぼ並行するように3条検出。

#### 1号溝

南西から北東方向に向く、南西部は開発地外であるが、溝は延びていた可能性をもつ。形状は逆台形を呈し、底面は平坦で埋土は単一層である。1号墳丘に切られ、深さは残りの良い所で 0.4mを測る。

# 2号溝

北東側から南へ向き、北東側へ延びる可能性をもつ。底面は緩やかに曲線を描き、断面はU字状を呈す。幅0.8m、深さは残りの良い所で0.1mで、埋土は単一層。

#### 3号溝

やや蛇行して、南西から北東方向に向く。2号土壙の付近で一旦途切れて、さらに北東方向へ延びて1号墳丘の周溝付近で終るが後世の削平のため延びていたかどうかは不明である。形状は細長い土壙状を呈し、深さは0.3mを測る。灰原遺構とPit15に切られ、2号土壙を切る。

### 出土遺物 (Fig. 9)

6・7は3号溝出土。8は2号溝出土遺物である。6は甕の口縁部片で色調は内外共に淡橙色でローリングのため器表剥落して調整は不明、胎土には細砂粒が多量に含まれる。7は粘板岩製の石包丁片で、大部分を欠損しているため、詳細は不明。8は染付碗片で施釉は全面に施されている。

胎調は濃灰白色で、見込みに二本の罫線、体部内面に文様を 描いている。

# 4. その他の遺構

3号溝状遺構、2号土壙及Pit15を切るように灰原が検出された。灰原は検出時には西側から東側へ不連続な広がりをもった二つのブロックに区切られ、北側よりⅠ区・Ⅱ区とする。 Ⅰ区・Ⅱ区ともに等高線をやや斜めに横切るように検出され、

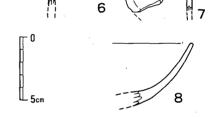


Fig. 9 溝状遺構出土遺物 (S1/3·1/2)

しかも窯体及び焚口からは連続してはいない。規模は I 区が南北に1.5 m、東西 7 m、I 区が南北 1.5 +  $\alpha$  m、東西 5 mを測る不整形土壙の形状を呈す。ともに中央付近が僅かに凹んで灰層の堆積がやや厚い。しかしながら全体的に削平されてる可能性が強いため残りの良い所で 0.2 m程度の厚さである。しかも灰原の中からは遺物は、まったく出土しない。 I · I 区の延長上の境界の土層を精査したところ、1 号溝付近に、地山が熱を受け約 5 cmの厚さに焼け固まった壁状のものや、熱により赤変した土層( $Fig.10-1\cdot2$ )の堆積を検出した。この土層図及び灰原遺構から推察すると窯状遺構の存在は否定できない。しかし窯本体のあったと思われる隣接地は、家屋建築のため旧地形をとどめることなく削平されている。このため窯本体もすでに大半が欠失しているものと思われる。

- 1・2の土層図からは窯体の主軸方向・規模などは明確にならないが、以下に層序により観察できた事を述べておきたい。
- 1・2ともに地山が熱により変色した土層が看取でき、崩壊によって地山、旧地表面も落下していて、ドーム状の天井部が存在していたと推測できるが、天井部や壁面部の粘土による補修は、ま

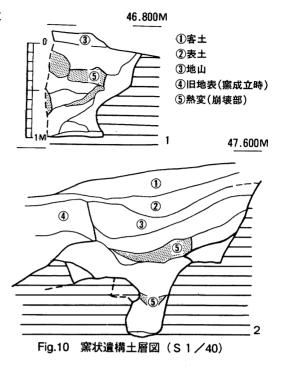
ったく認められない。また、側壁から天井部の境界付近 には熱を受けてない部分がある。

窯体内部には、僅かな炭混りの堆積があるが、遺物は まったく含まれなく、灰原の状況と同様である。これら から予測されることは炭焼窯の存在であろう。

調査区内には約50個のピットが検出された。これらのピットは、建物跡としてまとまりのあるものは見いだせなかった。出土遺物も少なく、図示可能な遺物を含んでいたのは、ピット1・6・12・14・15のみであった。この中でもピット15には2個体の甕が、つぶれた状態で検出され、この高雄遺跡も吉ヶ浦遺跡同様に弥生時代中期から後期にかけて人々の生活が営まれていたことを示唆している。ピット15はピット6に切られ、また3号溝を切って検出された。

# 出土遺物 ((Fig.11·12, PL.3)

9 は復原口径19cm、高さ 4.2cm、 底径 4.2cmを測る蓋。焼成は良好。 内・外面ともに淡褐色を呈す。外面 の一部に黒斑があり、内外共に丁寧 なナデにより整形されている。10は 器壁の厚い器台、器面の調整は剥落 のため不明。指頭による凹凸が顕著 で、内外ともに淡茶褐色を呈してい る。11~13は甕の口縁部、焼成はい ずれも普通、12は大型のもので丹途 りの痕跡がウッスラと残る。14は Pit 6 出土の甕の底部で、丸底に近い が僅かに平坦部をもつ。焼成は良好、 胎土には砂粒 1~6 mm が含まれ、 外面にはやや粗い刷け目が施され、 内面は指による成形痕が顕著に残 る。15~17は弥生中期の甕の底部。 15・16はローリングが著しく調整は 不明。17は焼成良好で内外共に淡茶 褐色を呈す。外面は上方から下方へ やや粗い刷け目が施されている。内 面は指による成形跡が顕著。18・19 は Pit15出土。復原口径13.3cm、高



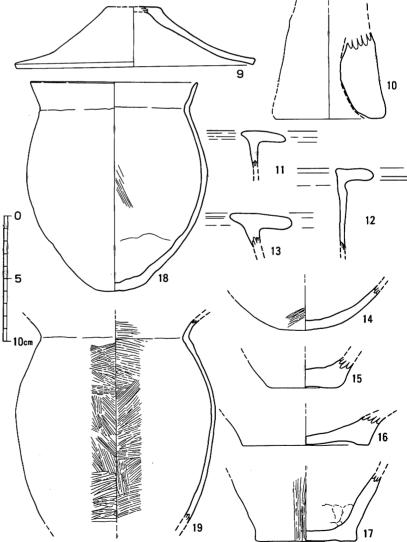


Fig.11 出土遺物実測図(S1/3)

さ16.6cmを測る。外面の器表面がやや剥落しているが、頸部から底部付 近まで叩き痕が残り、黒斑も残る。胴部に最大径があり、底部は凸レン ズ状を呈す。胎土は僅かに砂粒が混る。19は口唇部と底部を欠失してい るが、最大径が胴部にある。外面の胴部下位から底部付近に叩き痕が残 り、胴部には上方から斜方向の刷け目、頸部から胴部にやや横方向の刷 け目が施されている。20は黒曜石製の石鏃で、先端部と一方の脚部を欠 損している。

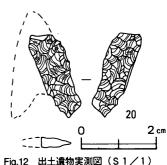


Fig.12 出土遺物実測図(S1/1)

# ₩. まとめ

高雄遺跡の位置する高雄丘陵域は、弥生時代の集落跡、墓地群の存在が特に顕著であり、古墳時 代へと引継がれていたことは既に述べたが、古代、大宰府造営に伴い、人々の生活の痕跡は弥生・ 古墳時代ほどの顕著さは認められない。しかし高雄丘陵および縁辺の丘陵部には数多くの古墳が造 られていて、この周辺域の利用のされ方の一端を示しているものと考えられる。

今回の調査は、高雄遺跡のごく一部なので遺構についての周辺地域における歴史的位置や背景な どについては推定の域をでないが、問題点をあげておきたい。

# ①灰原について

窯本体は削平されている可能性があるため窯体の主軸方向・構造・規模についての詳細は不明で あるが、炭焼窯の存在したことは否定できない。ここより西 1.2kmの所には、時期は不明だが 4 基の 窯跡と製鉄遺構の検出された池田遺跡が存在する。

両遺跡ともに古代以降の造営ならば、郭外東南部の生産地として府内と密接な関わりをもつもの と考えられるが、時期不明のため推定の域を脱しない。

炭焼窯の存在を考慮にいれると、近辺に製鉄遺構の存在の可能性が考えられるが、今回の調査区 内では、検出されていないし、昭和43年の調査でも検出されていない。いずれにしても近辺に製鉄 遺構の遺存する可能性は否定できない。

#### ②墳丘状遺構について

墳丘の立地については概要でも述べたが、展望の良い丘陵斜面に立地していて、低い墳丘を有し ていた可能性をもつ。構築方法も終末期の古墳の造営過程を踏襲している。

同様な墳丘の検出例は、高雄遺跡より南西 0.5kmの上の浦遺跡で1基検出されている。概ね一辺 7.7mの方形を呈し、周溝を巡らせ、一辺に陸橋部をもつ。さらに南西 0.5kmの所には野田墳墓群が 存在する。丘陵上に約7~8mの方形の低い墳丘をもち、上の浦遺跡のものと同様に周溝を巡らせ、 一辺に通路と推定される陸橋部があり、弥生時代の方形周溝墓を彷彿させる。墳丘上はほぼ平坦で 複数の木製容器が納置されたものもある。同様な墳丘状遺構が13基・土壙墓2基が検出され中世の 造営と報告されている。

高雄山より派生する同一丘陵上に存在するものとして、今回高雄遺跡で検出された2基の墳丘状 遺構は時期は不明で、形状も規模も上記の2例とは若干の違いがある。しかしながら近隣および、 九州内の発掘例を知見すると、①墳丘を有し、大規模なもの、②墳丘を有し、小規模なもの、③問 溝だけで区画するものに大別できるようである。さらに形状は方形プランにこだわらず、円形プラ ンも含まれる。概して検出例の多くは時期が明確になったものは少なく、中世のものであろうと大 きく扱われている。このことから今回、検出された墳丘状遺構も近似のものと理解しておきたい。 墳墓としての性格以外の具体的な検討は、太宰府市の文化財第22集「高雄地区遺跡群」にまとめ られているので検討はさけたい。

大宰府を中心とした葬制の変遷については、古代では平野から遠い丘陵部に立地し、その後市街地へと距離が近くなり、都市部の衰退とともに平野部、しかも宅地周辺に造営される例が多くなると既に報告されている。さらに中世になると平野部へ進出した墳墓の造営は、再び平野周辺の低丘陵部へと移動して、墳丘もしくは方形壇状遺構を中心にして土葬墓・火葬墓・火葬施設が取り巻くように存在するとあり、野田墳墓群はこれに該当すると考えられる。

高雄遺跡・上の浦遺跡では調査面積が狭小な場合であることは否めないが、この墳丘状もしくは 周溝墓周辺には土葬墓・火葬墓・火葬施設の遺構は検出されていない。しかも高雄遺跡の場合、直 接遺体を埋葬した可能性をもつ主体部が存在し、追葬などは考えられない遺構である。筑紫野市内では類似した遺構例が、国道 200号線バイパス関係埋蔵文化財調査概報に報告されているが、これは 副葬品により時期が確定されている。同一地区内のニュータウン発掘調査でも数例検出されているが時期の確定できるものは少ない。以上のように限定された地域や時期の不確実さ、検出例不足の中で問題としてあげるのは、いささか躊躇するが、大宰府を中心とした中世以降の墓制は一般的に は墳丘もしくは壇状遺構を中心にしたものであるが、それ以外の地域には、古代からの造墓形態を ひき継いだものが遺されている。無論この趣の違いは被葬者の階級層の違いが含まれているが、造墓の背景や被葬者の背景など問題として残る。今後資料増加により新知見が得られれば、改めて深く検討してみたい。

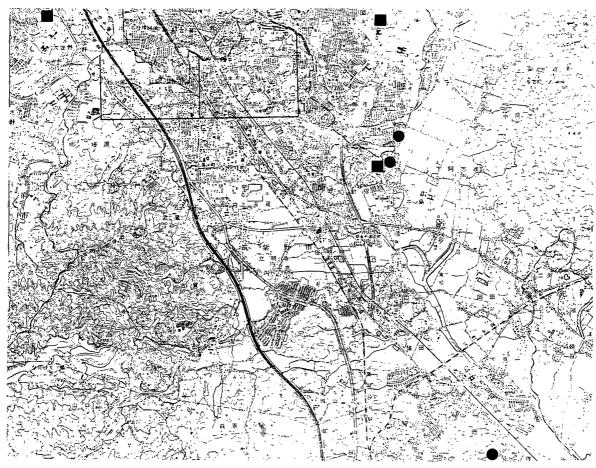
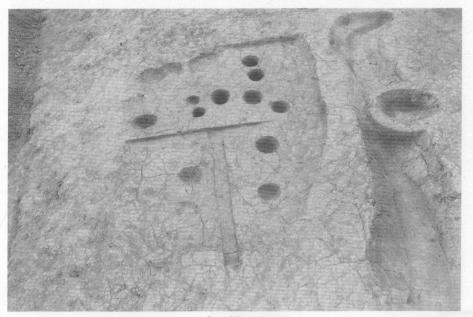


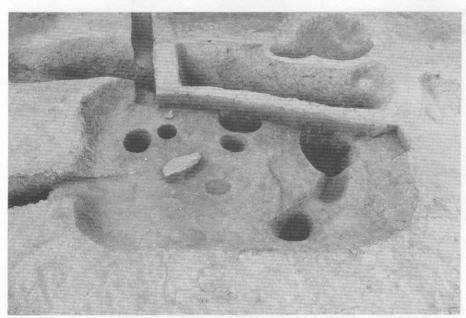
Fig. 13 周辺中世以降墳墓分布図(S1/50,000)

# P L



全景南側

土 壙 1



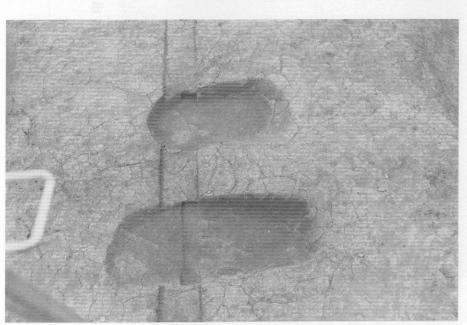
土壙



全 景 北側



2号墳丘(南から)



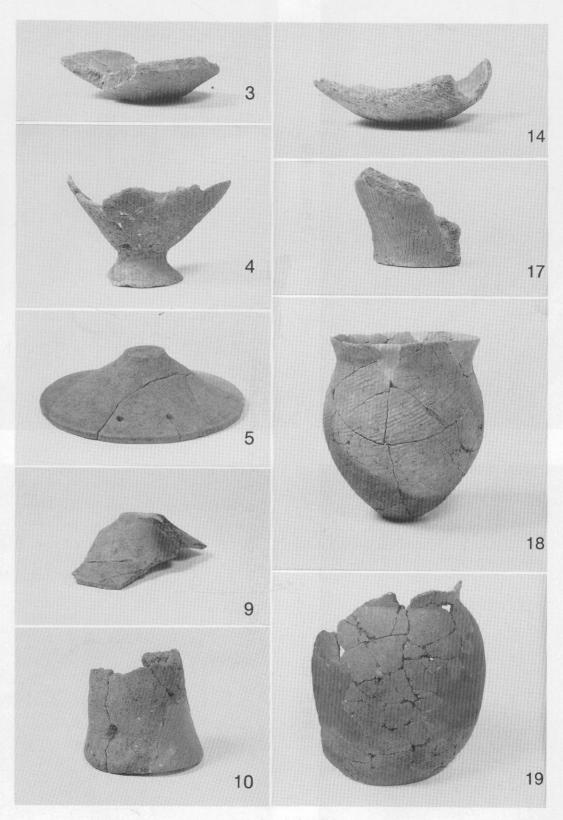
1号墳丘主体部



1 · 2号墳丘状遺構



1号墳丘(北から)



P L .3 出土遺物

フリガナ	タカオイセ	:+			-					• .
書名	高雄遺跡Ⅱ									
副書名		•								
卷  次			:							
シリーズ名	筑紫野市文	化財調査	報告書							
シリーズ番号	第48集									
編集者名	渡邊和	1 子				٠.				
編集機関	筑紫野市教	育委員会			,			,		
所 在 地	〒818 福	岡県筑紫野	予市大字二	日市753-	-1 ′	TEL	092-923	3-111	1	
発行年月日	西暦1997年	-3月31日								
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地		遺跡番号	北緯	東	経	調査機関	調査面	ī積 m²	調査原因
高雄遺跡	、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	筑紫野市	ī 170188	33度 29分 23.7秒	32	0度 2分 .4秒	1994 9.20 \$ 1994 10 · 31	600		宅地造成
所収遺跡名	種別主	な時代	主を	遠構		É	となり遺	物	— 特	記事項
高雄遺跡	•	弥生	土壙 溝 灰原 墳丘状边	遺構			弥生土器片	T .		
		-								

筑紫野市 阿志岐所在遺跡の調査

たか ね **遺 跡 Ⅱ 高 雄 遺 跡 Ⅱ** 筑紫野市文化財調査報告書 第48集

発行 筑紫野市教育委員会 福岡県筑紫野市大字二日市753-1 印刷 秀英社印刷株式会社 福岡県筑紫野市武蔵313-13